第１回都立新国際高校（仮称）開校に向けた専門家会議

１　日　　時　　令和５年７月２６日（水曜日）午後３時から午後５時
２　会　　場　　オンライン会議
３　出 席 者　　荻野座長、藤田副座長、米村委員、篠﨑委員、齋藤委員、市村委員
４　議　　事

＜座長・副座長決定＞

〇座長に荻野委員が就任。座長より副座長に藤田委員を指名。

＜議事＞

〇都立新国際高校（仮称）の検討について

〇特色ある教育活動について

　都立国際高等学校、都立立川国際中等教育学校・附属小学校の取組

〇検討の視点について

＜委員等発言要旨＞

〇IB 教育の良いところを、しっかり日本の良いところと結合させながら、日本の新しい教育を作っていくことで、主体的な対話的な、そして深い学びに導いていくことが可能。IB 教育のレギュラーコースへの発展応用というのは、まさに日本社会が今直面している大きな課題。

〇IB 教育で大切にされている「学問的誠実性」（Academic Integrity）を取り入れて、アカデミズムの世界で通用するお作法を若いうちから身に付けさせてほしい。レポートを「調べ学習」で終わらせることなく、オリジナリティが大切なのだということを学ばせてほしい。

〇多様性やグローバル化の視点では、大学進学以外の進路を目指す生徒たちが育ってもよく、いろいろな幅を与えられる機会が高校時代に提供できると素晴らしい。

〇社会では教科横断、融合、データサイエンスなどの必要性が言われており、学習に自然科学的な視点が導入されればパースペクティヴな取組になる。

〇すでに議論されているところだと思われるが、教科横断的な学習や文理融合的な学びが実施しやすいカリキュラムを作ってほしい。理念はわかっているものの、なかなか具体的にカリキュラムに入れ込むことに困難さがある。カリキュラムマネージメントのしやすい条件整備が望まれる。

〇「情報」の学びを深め、AI と英語を駆使する力があると、社会に出て行く武器になる。

〇港区の中学校と交流する素地、連携を模索してほしい。

〇地の利もいいので、在学中に国内外の大学の研究機関や大使館等、入り口のパイプとなる海外との繋がりをしっかりやるといい。

〇新国際高校（仮称）と国際高校、両方とも発展するような形で、差別化を考えた方がいい。

〇英語を共通言語として持つことは大事だが、大使館等の交流するところは英語圏だけの国ではなく、何でも英語一辺倒でやればいいという話ではない。

〇ICT 技術はもう特別視するものではないので、さらに一歩進めていくためにどうしていくかを

考えていかなければいけない。
〇オンラインで話ができるのは非常に便利だが、特に外国語を学んで、いろいろな人たちと接する時には、生身のところでどういう交流ができるかの体験は大事。リアルにも交流ができる機会を取り入れ、海外でやることも当然だが、国内でも結構な形でできる立地なので、体験をできる限り豊かに取り入れる。
〇国際交流をただ単なるイベントではなく、成果学習とどう統合していくか、普段の授業の中でどのように教科横断型な考え方が取り入れられるかを念頭において、プログラム作りをしていくことが非常に大切。
〇国際交流センターを校内に置き、外部人材の登用で専門家を活用するとよいのではないか。
〇公的な機関だけでなく、周りにあるインターナショナルスクールとの交流も取り入れるとよい。
〇生徒が選ぶ海外研修旅行として、生徒がいくつか国を選んだり、同じ国に行く場合でもテーマ毎に違う場所でボランティアを行ったりするなど、探究で学んだことを実際にフィールドワークとして実践するなど、既存の行事を同校ならではの内容で実施するとよい。
〇海外大進学が大きなテーマ。国際バカロレアの普及促進に向けた検討に係る有識者会議の取りまとめに、「学校を超えて、情報・ノウハウを共有する仕組みの構築が効果的で、学校を超えた進路指導の在り方についても検討が必要」とある。新国際高校（仮称）が核になり、海外進学のセンターになっていくということも必要。
〇海外進学とセットとして、お金をどう工面していくか。将来の投資ということで民間のお金等お願いしながら、寄付を受け付けないということではなく、もう少し幅広く、逆に寄付文化を作るという方向転換も必要。
〇探究的な学習を担当する教員や IB 校の教員を、研修で、学校の地域、都道府県、あるいは学校の種類を超えて有能な人材を相互にやり取りできるような仕組みが必要。
〇生徒の第一言語、あるいは母語、日本語ではない母語を、新国際高校（仮称）では少なくともどう現状維持していくか、さらに言えばどう伸ばしていくか。制度を作ってほしい。